

# 《2006年11月例会報告》

【日 時】2006年11月17日（金）19：00～21：00（→その後「ルン」）

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【テーマ】バヌアツ共和国で感じたこと

【報告者】岸卓巨（中央大学・DUOリーグ事務局）

【参加者（会員）】中塚義実（筑波大学附属高校） 高田敏志（少年サッカーコーチ／町田高ヶ坂SC）

【報告書作成者】岸卓巨

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## バヌアツ共和国で感じたこと

岸卓巨（中央大学・DUOリーグ事務局）

\*\*\*\*\*

### はじめに

バヌアツ共和国をご存知でしょうか。南太平洋に浮かぶ人口約20万人、面積はほぼ新潟県程の島国である。私は、2006年9月1日～9月16日まで、SCIというNGO主催のワークキャンプに参加して、バヌアツ共和国を訪れ、現地の学校建設を主な目的としながら、サッカー村対抗戦での審判や、村でのルール講習会などを開催した。今回の月例会では、その時の様子や、バヌアツ共和国について、また、バヌアツ共和国のサッカーについて報告する。

まず始めに、バヌアツ共和国のイメージをつかんでいただくために、9月に日本テレビで放送された「所さんの笑ってこらえて ダーツの旅全世界版スペシャル バヌアツ共和国エファテ島編」を見ていただいた。これは、所ジョージが地図に向かってダーツを投げ、当たった国にスタッフが足を運び、現地の人々と交流する番組であるが、このDVDを見ることにより、あまりなじみのないバヌアツ共和国の人々の明るさや自給自足の生活を少し分かっていただけたと思う。私が訪れたエパオ村の映像もあり、知っている顔も出ていたので、説明を加えながら、今回の報告への導入を行った。



## バヌアツ共和国紹介

### バヌアツ共和国基本データ

- 人口:約20万人
- 首都:ポートビラ(エファテ島)
- 面積:新潟県とほぼ同じ 83の島
- 通貨:バツ 1Vatu=約1円
- 政治:議員内閣制・一院制・国家元首の大統領
- 部族の首長によって構成される評議会
- 気候:熱帯海洋性  
11~3月(夏季) 30°C以上  
6~9月(冬季) 20°C以下になることも
- 基幹産業:海産物加工業・観光業



バヌアツ共和国は、2006年7月にイギリスのシンクタンクによって「地球上で最も幸せな国」に選ばれた。GDP水準など経済的には極貧国に当たるが、自給自足で欲のない生活を送るバヌアツの人々に、貧しさは全く感じられない。とにかく、のんびりとした気質であり、雨が降ったら仕事はしない。宗教は、キリスト教で、食事の前などにはお祈りをし、日曜日は休日である。私が訪れたエパオ村の人々の年代別特徴としては、子供はとても人懐っこく、歌が大好き。私にもいっぱい歌を教えてくれた。若者は、逆にシャイで、サッカーを通して親しくなるまでは、なかなか会話をすることが難しかった。それに対して、おじさんおばさんにはとにかく話好きな人が多い。村のチーフの挨拶などでもどうしてそんなに話すことがあるのかと疑問に思うくらい話が長かった。エパオ村以外の人々にはあまり会わなかったが、聞いた話によるとこのような特徴は他の村の人々にも当てはまるようだ。

### ・バヌアツ人の言葉

バヌアツ共和国の人々は実に多くの言葉をしゃべる。まず、村によって独自の言葉がある。これは、長年村同士、部族同士の争いが激しかったためだ。しかし、国全体として何か行おうと考えた場合、それぞれが異なった言葉を使っているのでは、都合が悪い。そこで、生まれたのがビシュラマ語である。ビシュラマ語は、英語を簡単にしたような言葉で、例えば track も car も bus も全てビシュラマ語では track と呼ぶ。つまり、track が迎えに来ると言った場合、迎えに来るのが、しっかりとドアも屋根もあるバスなのか。それともトラックの荷台に乗せられるのかは分からない。さらに、私のことは mi、あなたは yu、そして私とあなたを合わせた私たちは yumi と呼ばれ、英語のように主格や所有格などの区別はない。疑問文は肯定文の語尾を上げるだけである。過去形は語尾に finish、未来系は文頭に bae を付けるだけだ。このようにビシュラマ語は、英語が苦手な中高生が喜んでしまいそうな言葉である。自分も3週間バヌアツに滞在し、だいぶビシュラマ語をマスターできたと思う。バヌアツ人は他にも、英語やフランス語を話す。これは、1906年から長らくイギリスとフランスによる共同統治が行われていたためである。以上のようにバヌアツ人の多くは、自分の村の言葉に結婚相手の村の言葉、ビシュラマ語、英語、フランス語など5つからの言葉を操る。大人は、この区別をしながら話してくれるからいいのだが、子供たちは、これらの言葉を混ぜて使うため話している内容が全く分からない時が多かった。

### ・バヌアツの食べ物

バヌアツの代表的な料理としては、ラップラップが挙げられる。ラップラップは、マニョックという芋やバナナなどをすり潰し、ココナツミルクをかけ、葉に包んで蒸し焼きにしたもので、食感は、餅とういろを合わせたような感じだ。まずくはないが、毎日食べていると飽きてくる。この他、フランスとイギリスの統治下であった影響もあり、パンはおいしい。私が滞在したエパオ村には、パンを焼くための石釜があり、毎朝焼きたてのパンが食べられた。

食べ物ではないが、バヌアツの代表的な飲み物としてカバというものがある。カバは、生姜のような形をした気の根っこをすり潰し、水でろ過した飲み物で、味は泥のようでとてもまずいが、酔っ払うことができるため、男たちは夜集まって度々飲んでいる。カバは神聖な飲み物であると考えられているため、ビールのように皆で会話をしながら飲むのではなく、空腹時に1人で静かに一気に飲むのがマナーだ。自分も、何度かチャレンジし、コップ1杯ほどで歩けなくなるほど酔っ払った。

### ・日本とバヌアツ共和国

現在、136人の協力隊が日本からバヌアツ共和国へ派遣されている。

無償資金協力は72.38億円(2000年～2004年)

2003年にはオーストラリア・ニュージーランド・フランスに次いで4番目の経済協力実績がある。

日本人のいる旅行社、日本食店はバヌアツ国内に各1店舗しかない。

直行便がないため、まだまだ日本人の観光客は少ない。

### ・メラネシアの国々

バヌアツ共和国は南太平洋のメラネシア地域に属するが、バヌアツ(165)とともにメラネシア地域を構成しているのは次の国々である。

- ・ニューカレドニア(174)
- ・ソロモン諸島(162)
- ・パプアニューギニア(177)
- ・フィジー(153)

括弧内は2006年11月現在のFIFAランキングを表す。

## SCI ワークキャンプ in VANUATU

今回のワークキャンプの概要について説明する。期間は、2006年9月1日から9月16日で、滞在場所は、バヌアツ共和国エファテ島のエパオ村である。このエファテ島には首都であるポートビラがあり、この首都にはいくつかホテルもある。それとは、対象的にエパオ村は、村民約350人のとても観光とは程遠い自給自足の生活を送るのんびりとした村である。

今回のワークキャンプを主催するSCI(サービスシビルインターナショナル)は、1920年にヨーロッパで誕生し、オーストラリア・ドイツなど約30数カ国に支部を構え、夏を中心に年間300前後のワークキャンプを行っているNGOである。日本では1964年に支部が設立された。今回のワークキャンプは、日本支部とオーストラリア支部の共催ということで、参加メンバーは、オーストラリア人4人、日本人6人の他、ドイツとスイスからそれぞれ1人ずつの参加者がおり、合計12人で行われた。

### ・今回のキャンプの目的

今回のキャンプの主目的は、村に新しく作られる小学校の校舎建設の手伝いであった。バヌアツ共和国は、もともと日本やオーストラリアからの援助を多く受けている国で、現在エパオ村にある小学校の校舎は、オーストラリアからの ODA で設立されたものであり、学校制度の変化に伴い校舎の増設が必要となったため、今回のワークキャンプでその学校建設の手伝いをする事になったのだ。しかし、実際には、バヌアツ人ののんびりとした気質が学校建設にも影響し、建設開始の遅れや休憩の多さなどとてもスローペースで仕事が進められた。ちなみに、完成目標は 2006 年内だったが、ワークキャンプ終了から 5 ヶ月以上経った現在でも建設は終了していない。



### ・キャンプ参加の経緯

このあまり日本で知られていないバヌアツ共和国でのワークキャンプを選んだのは、大学のゼミの教授がもともと青年海外協力隊としてバヌアツ共和国サッカーナショナルチームのコーチを務めており、現在でも南太平洋を研究領域としている方で、その方からバヌアツのサッカー事情や海のきれいさなどいろいろと国の様子について聞いていたためである。教授の話聞き、この国に行きたいという気持ちが高まっていた。そんな時に、このキャンプを紹介されたため、紹介された翌日には参加を決定していた。

### ・キャンプスケジュール・主な出来事

- 8月31日：日本発 ニューカレドニア・ヌメア到着 ユースホステル泊
- 9月1日：ヌメアからバヌアツ・ポートビラへ移動 現地のシニア協力隊の方に夕食をご馳走になる
- 9月2日：海中ポストで有名なハイダウェイで他のキャンプメンバーと初顔合わせ エパオ村へ移動
- 9月3日：今日から学校建設の手伝いをスタートする予定だったが、村の現場担当者が不在で作業が開始できない。子供たちとプレプレバルーン
- 9月4日～7日：昼間は肉体労働、夕方はサッカー
- 9月8日：村から歩いて30分程の農園へ行き野菜採取
- 9月9日：他のキャンプメンバーと別行動で、村の人々と一緒にサッカー村対抗戦に審判として出場 夜はエパオ村の優勝を祝いカバでパーティー
- 9月10日：サンゴがとても美しい Emau 島を訪れる
- 9月11日：昼間は肉体労働、夕方はサッカー
- 9月12日：学校建設の後、温泉へ。洗い場がなく海水温泉のため体はベタベタする
- 9月13日：村の人 (Funny Sum) の家にホームステイ
- 9月14日：雨のため仕事は中止 サッカールール講習会開催 夜はお別れパーティー
- 9月15日：エパオ村から村人たちに見送られ空港があるポートビラへ移動 夜ヌメアへ出発
- 9月16日：日本帰国

今回のワークキャンプにおいて、キーポイントとなったのは、9月9日の村対抗サッカー大会である。この日、自分以外のキャンプメンバーは、1泊でEmau島に遊びに行ったのだが、自分はどうしてもバナアツのサッカー大会を見てみたい、さらには他国で審判を行うという貴重な機会を逃したくないということで、1人で村に残り、村の人々と一緒にサッカー大会に出場した。この行動が、エパオ村の人にも気に入ってもらえたようで、この日以降、村のあちこちで「TAKUMI TAKUMI」と呼ばれ、自分もサッカーのルール講習会を開催するなど、村の人々との距離をととても近づけることができた。ここからは、私がバナアツで体験したサッカーについて話したいと思う。

## 日常のサッカー



日常的なサッカーシーンについて子供と大人に分けて説明する

### ・子供たちのサッカー

日本で使われているようなしっかりとしたサッカーボールは町に行かないと手に入らない。値段もバナアツの人々にとっては高い。そこで、子供たちがいつも使っているのは、バルーンと呼ばれるやわらかいゴムボールである。子供たちはとても人懐っこく「プレプレバルーン」と言っていて私が仕事をしていない時は頻繁にサッカーに誘ってくれた。子供たちと遊んでいて驚かされるのは、子供たちの足の強さである。砂利混じりのグラウンドでも海辺の岩場でも平気で裸足で走っている。自分も子供たちと同じ条件で遊ぼうと思い、靴を脱ぐのだが、石が足裏に刺さりなかなか走れない。便利な生活に慣れ、人間は退化してしまったようだ。

### ・大人たちのサッカー

大人は子供たちとは対照的にサッカーボールを使う。靴はしっかりとしたものを履く人もいれば裸足の人もいる。レベルはというと、毎日仕事が終わった5時から日没まで、デコボコのグラウンドでボールを蹴っているから個人の基礎的な能力は低くない。身長も高く当たりは強い。自分は日本でレフリーをやっているということをエパオ村に来てすぐの自己紹介で話していたため、レフリーをやってくれと頼まれた。しかし、レフリーをやれと言われてもチームを分けるビブスもなければ、瞬時に顔の区別をすることもできない。副審もない中で、オフサイドを判断することはとても難しかった。

この大人たちのサッカーでビックリしたのは、日没でゲームを終えた後、横一列に並びダッシュやブラジル体操など現在日本でも行われているようなクールダウンをしていたことだ。エパオ村サッカーチームのキャプテンに尋ねたところ、これは以前ボランティアでエパオ村を訪れたアメリカ人が教えてくれたそうだ。

## East Efate League 開幕記念試合

毎日仕事が終わってから大人たちとサッカーをしていたところ、自分が滞在中の土曜日に近くの村で村対抗のサッカー大会があり、そこで審判をやってみないかと誘われた。海外で審判ができるチャンスなんて滅多にないだろう。他のキャンプメンバーは既に1泊で近くの島へ遊びに行くことを決めていたため、自分だけ別行動をすることに多少申し訳ない気持ちはあったが、せっかくバヌアツまで来ているのだから現地の人々とできるだけ一緒に過ごしたいという気持ちもあり、村のサッカーチームと一緒に大会に出場することにした。



当日まで知らなかったのだが、この大会はエファテ島の東側にある4つの村が集まって、来年から行われる East Efate League の開幕記念試合だった。これまでエファテ島では、北部の North Efate League、最もレベルが高い首都を中心とする Port Vila League の2つが行われており、2007年7月から East Efate League が加わり、3つの地域リーグが行われる予定らしい。この地域リーグで勝ち上がると Province League と呼ばれる上位リーグに出場できる。

East Efate League の特徴としては、サッカーと共にバヌアツで大変人気のあるバレーボールのリーグが同時開催されることや、VPM (Vanuatu Project Management) というスポンサーがいることなどが挙げられるだろう。VPMがどのような組織なのか、詳しくは分からないが、VPMの人と話した様子では、アメリカ企業の地域貢献事業のようだ。バヌアツでは法人税が掛からないため、アメリカの企業などがバヌアツに現地法人を設けていることがよくある。このような企業が、地域への貢献を目的として今回のケースのように村の支援などを行う場合がある。VPMは、大会用に森林を切り開きグラウンドを整備した他、全ての出場する村に2セットずつユニフォームやボールを支給していた。大会で優勝したエパオ村には賞金も与えられた。

大会では、ユニフォームでしっかりとチームが分けられていたため、審判はやりやすかった。覚えてたのビシユラマ語も使いつつ、うまくゲームをコントロールできたと思う。また、この大会出場を通してバヌアツ人の国際サッカーへの憧れを強く感じられた。試合開始前の入場も、ワールドカップで行われるようにチームごとに1列に並んで入場する。エパオ村には、日本から青年海外協力隊の方が来ているため、ドイツワールドカップの時は、村に回線を引いて日本の3試合だけ見ていたようだ。しかし、テレビで部分的にしか見ていないため、ルールの理解については乏しい。ゴールラインはゴールポストから引かれており、フリーキックの時審判が壁の枚数を指示していた。国際ルールを知りたいと思っても知る機会がないのだろう。

この大会でエパオ村は、サッカー・バレーボールともに優勝し、帰りのトラックではみんなご機嫌だった。この大会出場を通して村の人たちとかなり親しくなれたと思う。この日のカバの味は忘れられない。



左：バヌアツの国旗 右：VPMの旗



VPMから提供されたユニフォーム

### エパオ村でのルール講習会

大会に出場してみて、エパオ村の人々がサッカーの国際ルールを知りたがっているのに、それを学べる機会がないということを感じたため、村の中でルール講習会を行った。各エリアの説明など基本的なことからフリーキックの時に審判が手を上げるのは壁の枚数を指定するためではなく、間接フリーキックの合図であるなど、大会で分かったルールの誤解についても説明した。英語や時にビシュラマ語を用いて行ったのだが、とても熱心にメモを取りながら自分の話を聞いていただき、とても感動した。



## バヌアツサッカー事情

ここからは、帰国後に調べたバヌアツサッカーの歴史などについてお話しする。

### バヌアツサッカー事情

1964年 フランス系の市民を中心にニューヘブリデス  
サッカーリーグ結成

1974年～1979年 フランスカップ参加

独立後 Vanuatu Football Federation設立

1988年 FIFA加盟

1991年 W杯予選に初参戦

1999年 Juan Carlos が FIFAより派遣される  
Port Vila Futsal League設立

2001年から FIFA “Goal programme”

2003年 女子のバヌアツ代表が国際戦デビュー

2004年 オセアニアネーションズカップ兼ワールドカッ  
プ予選 2次予選6位敗退

オセアニア地区には、ラグビーが盛んな国が多いが、バヌアツは、宗主国であるイギリスとフランスの影響を強く受けており、ラグビーよりもサッカーの人气が高い。英仏統治領ニューヘブリデスとして知られていた頃には、フランスサッカーとの結びつきが特に強く、1964年には、フランス系の市民を中心にニューヘブリデスサッカーリーグが結成され、1974年から1979年にはバヌアツのクラブがフランスカップに出場していた。

独立後は、「Vanuatu Football Federation」と名称を変え、FIFAに加盟したのは1988年である。1991年には、ワールドカップ予選にもバヌアツ代表として出場。それ以降、これまでのワールドカップ予選には全て参加してきている。ドイツワールドカップ予選ではオセアニア地区で2次予選敗退という結果を残した。バヌアツは多くの面でさまざまな国の支援を受けているが、サッカーについてもFIFAの支援を数多く受けている。

#### 1999年 Juan CarlosがFIFAより派遣される

Juan Carlosは、ウルグアイ出身のFIFAインストラクターである。彼は、バヌアツに来て村と村の密接なコミュニケーションが行われていないことや、スパイクを買うお金もない選手がいるような財政面での困難を乗り越えながらバヌアツのサッカー環境を大きく変化させた。例えば、彼は5年間でサッカーの能力を高めるプログラムを考え、新しいコーチングシステムづくりや小学校でのサッカー指導、中学校での試合の活性化など年代別にサッカーを学ぶ環境を整えた。また、元ナショナルチーム選手のJacques Seseが教育・青少年スポーツ省の大臣だったため、このプログラムを学校のカリキュラムに組み込むことができた。

2000年のオセアニアネーションズカップでは、バヌアツ代表がオーストラリア代表を1-0で破るといふ快挙も成し遂げた。



## 2001年 FIFA “Goal programme”

Goal Programme とは、1999 年から FIFA によって展開されている途上国支援プログラムであり、トレーニングセンターやサッカーアカデミーの設立、天然芝ピッチの造成など、現地のサッカー協会自身が振興計画を立て、FIFA が直接的に資金援助を行うものだ。バヌアツでも 2001 年からこのプログラムが行われている。当初、バヌアツ共和国サッカー協会が立てた振興計画には次のものがある。

### 1) サッカーアカデミー建設

ここでは、サッカーの技術向上だけでなく、健全な青少年育成も目標とされた。

### 2) 2005 年までに少なくとも 2 人の選手が海外に移籍する

### 3) 2010 年までに国際的な認知度を上げる

しかし、実際には建設用地の取得問題や財務担当者の横領疑惑などで、計画通りにはっていない。また、サッカーを通じた健全な青少年育成についても、選手の競技力向上により国際試合で良い成績を収め国際的な認知度を上げることに重きが置かれた。理想と現実にはギャップがあったようだ。それでも、バヌアツサッカー協会の事務所が 2 階建て専用オフィスへと移転し、有給の専属職員が増員され、プロのコーチも派遣されるなど FIFA からの援助が与えた影響は小さくない。現在では、数名の選手がオーストラリアのブリスベンをはじめとした近隣諸国のチームに移籍している。

## 2003年 女子のバヌアツ代表が国際戦デビュー

Goal Programme と並行して行われた FIFA からの援助として、FIFA Financial Assistance Programme (以下 FAP) が挙げられる。FAP は、女子サッカーやフットサル、審判部や医科学部といった部門を協会組織の中に設置し、より効率的な運営体制を構築することを目的とした FIFA からの財政援助で、バヌアツではこのような援助のもと、「VISION VANUATU 2003-2006」が制定され、2003 年には女子のバヌアツ代表が国際戦デビューを果たした。

以上のように、バヌアツ共和国のサッカーは、かつては宗主国であるフランスやイギリスから、現在は FIFA から多くの援助を受けながら、発展してきている。しかし、バヌアツののんびりとした国民性はサッカーの場面でも変わらない。日本人のように集合時間には全員揃い、少々厳しい練習でも大会に向けて我慢してやるようなスタイルは期待できないのが現状のようだ。

## バヌアツ共和国で感じたこと

最後に、今回のバヌアツ滞在を通して感じたことを話し、本日のプレゼンテーションを終わりたいと思う。

### 欲張らないことが笑顔につながる

今回の滞在で出会ったバヌアツ人は皆とても素敵な笑顔をしていた。経済的には貧しいが、日々必要な量だけ食べ物を採り、のんびりと過ごす。バヌアツ人には、必要以上に「お金を儲けたい」や「地位を向上させたい」という欲はなく（その証拠として、バヌアツでの犯罪発生率はとても低い）、そのことが笑顔につながっているのだろう。バヌアツから帰って来て日本人は忙しすぎるような気がした。日本人にもバヌアツ人に見習うべき部分があるのかもしれない。

### サッカーは最高のコミュニケーション手段である

これは、ワールドカップでドイツに行った時にも感じたことだが、今回も村対抗戦出場やルール講習会開催などサッカーを通して、現地の人々ととても親密な関係を築くことができた。サッカーの特徴として、野球など他の種目に比べ言葉を使わなくても楽しめるという点があると思う。海外などうまく言葉が通じないところに行くと、サッカーをやっていて良かったとつくづく感じる。

### 多くの人にバヌアツの魅力を紹介したいが、観光客が増えすぎてしまうのも危険である

今回の滞在を通して本当にバヌアツ共和国が大好きになった。絶対にまた行きたいと考えている。そして、バヌアツの魅力を多くの人に紹介したいとも考えている。しかし、バヌアツ政府は観光収入を得て国を発展させようと考えているが、ホテルの数などを考えると、東南アジアの観光地のように世界各国からの観光客を受け入れることは難しいだろう。観光客が溢れ、エパオ村のような小さな村にも現地の人々の生活を尊重できない観光客が入り込み、のんびりとした生活リズムが壊れてしまうのは、ぜひ避けたい。珊瑚で美しい海など豊かな自然が破壊されてしまうことも懸念される。「地球上で最も幸せな国」に選ばれたことによって、国際的な知名度は今後上昇するだろうが、バヌアツの良さは、いつまでも守っていつてもらいたいものだ。

